

東北から日本の未来を 創造する円卓会議

第1回

寄りあいNIPPON

報告書

開催概要

■日 時：2013年9月11日（水）13：30～18：45

■場 所：仙台国際センター（宮城県仙台市） ■参加者：202名（スタッフ含め）

■プログラム

13：30 開会のあいさつ

13：40 全体会 第一部 キーノートスピーチ：岡本全勝氏（復興庁 統括官）

14：20 分科会 テーマ1. 自立とコミュニティづくりの課題の整理〔超高齢社会も見据えたまちづくり〕
～これから、それぞれの立場で行動する、連携する為の寄りあい～

テーマ2. 観光と人材交流の持続性〔地域資源の活用と発信〕

～地域資源の活用と発信、そしてこれからの進化と深化～

テーマ3. 子どもの遊びと学び〔子どもの成長を見守る安心な社会づくり〕

～未来を担う大人たちを育てる社会とは～

17：30 全体会 第二部 各分科会よりサマリー発表／クロストーク・質疑応答

18：40 閉会のあいさつ・終了

主催：寄りあいNIPPON 実行委員会

共催：特定非営利活動法人 ジャパン・プラットフォーム／一般財団法人 地域創造基金みやぎ

協力：特定非営利活動法人いわて連携復興センター／みやぎ連携復興センター／一般社団法人ふくしま連携復興センター

後援：復興庁／岩手県／宮城県／福島県／日本経済団体連合会／経済同友会／東北経済連合会／
東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）



観光と人材交流の持続性

[地域資源の活用と発信]

～地域資源の活用と発信、そしてこれからの進化と深化～

参加者 57名

登壇者 田中 慶一氏 (株式会社 JTB コーポレートセールス 第一事業部営業開発担当)

伊藤 聡氏 (一般社団法人 三陸ひとつなぎ自然学校 代表)

伴場 賢一氏 (一般社団法人 Bridge for Fukushima 代表理事)

ファシリテーター 渡辺 一馬 (一般社団法人 ワカツク 代表理事)

- 分科会の概要 -

東日本大震災では、観光資源や宿泊施設等にも甚大な被害が起きた。しかし、震災以前からある観光資源に加え、防災・減災をキーワードにした観光資源の活用等、新たな動きを模索している地域がある。また従来型の観光に留まらない「〇〇ツーリズム」や新入社員の研修を兼ねる動きが企業や観光事業者、NPO等によって始まっている。被災3県で、被災地の地域資源を活用した観光・研修旅行、そして交流人口の増加を通じた地域の活性化等に実際に取り組む方々を招聘し、今の取り組みと課題について提起してもらい、それを受けて参加者がそれぞれの立場で出来ることについて、寄りあって考えた。

趣旨説明

渡辺 一馬



被災地における観光は、ボランティア受け入れの延長線で発展してきた。そのため行程や人数が直前で変更される事が多く、現場はその対応に疲れてきている。もちろんそれに見合うだけの収入があれば良いのだろうが、むしろ被災地であることの特殊性から難しい部分もある。この現状を超え次のステージに移す為、ここに集まった方々で考え動き出したいと思っている。

課題提起 1

田中 慶一氏



震災後、お世話になった人への恩返しに被災地への温泉輸送計画を社外活動で取り組んだ。社内で福島を価値を創造するプロジェクトチームメンバーとして関わる傍ら、慶應義塾大学や Bridge for Fukushima 等との協業によるキャリア教育支援等様々なコーディネートも行った。

【発災から2年半経ち、感じる課題】

従来の観光業は一時的・一元的に着地型商品等で地域活性化を生み出してきたが、これからは持続的なモデルが必要。中でも企業や組織団体等の研修事業は地域との交流文化産業として育てていく事に期待が持てる。農林水産業等、基幹産業とも密接な関係があり、学び・発見・気づきを大切に、被災地と支援する側のミスマッチを起ささないよう両者の価値をいかに見出すか。さらに橋渡し役でもあるファシリテーターが重要性の鍵を握っているのでは。

課題提起 2

伊藤 聡氏



震災前は釜石の旅館「宝来館」で働きながら、グリーンツーリズムの推進を手がけた。震災後、旅館が避難所として使われる中で、復興の担い手になる意志が芽生えた。2012年4月、「三陸ひとつなぎ自然学校」を設立し、エコツアー・子ども事業・環境保全・地域課題解決等を受け入れている。今注力しているのは「いのちのみち」プログラム。3.11には、多くの人が昔の記憶を頼りに、使われなくなった林道を探し、家族の無事を信じて歩いた。実際に使われた林道を歩いて追体験する、メッセージ性の強いプログラムである。

【発災から2年半経ち、感じる課題】

無料で開設している事業が持続可能な仕組みではないことやコーディネーター不足が課題である。今後はきちんとした料金体系のプログラムの開発や、今ここでしか感じられない価値の提供、コミュニティープラットフォームの形成などを進めていきたい。

課題提起 3

伴場 賢一氏



震災後、途上国での緊急救援・社会的起業・開発援助の経験を生かし、一般社団法人 Bridge for Fukushima を立ち上げ、福島市、相馬市、南相馬市を中心に活動を行っている。震災前の福島県は、首都圏からの観光地であるとともに、ふるさと回帰支援センターの田舎暮らし希望地域ランキングでは1位だった。

【発災から2年半経ち、感じる課題】

マスコミが伝える福島の情報と現状が大きく異なること、既存の温泉地などの観光地は入込客数が激減し、壊滅的な打撃を受けていること等。解決のため、「ヒューマンツーリズム」を通じて復興現場の仲間を紹介すること等を通じ、NPO等を長期的に支えるファンを作っていく。また、研修型ツアーを日常的に実施する為に、語り部の確保や資料の標準化を進めるとともに、交流を増やす仕組みを増やしていくことに取り組んでいく。

課題整理とネクストアクション

本分科会で浮かび上がってきた課題は、大きくふたつ。一つは、受け入れ側のコーディネーター的人材が不足していること。コーディネーターの育成を含め、受け入れ側の体制強化が必要だが、現場が忙しすぎて、そこに時間をかけられないというジレンマ。そして、事前準備を含めたコーディネーターの人件費が十分に回収できていない。だから、なかなかコーディネーターが増えない。もう一つは、「観光」に対する思い込みが、被災地とお客とのミスマッチにつながっていること。現場では、これまでのような一回だけの物見遊山的「観光」から、被災地と継続的な関わり、いわばその地域のファンになってもらうための取り組みが始まっているが、まだ成功には至っていないようだ。

とはいえ、課題が分かりやすいこともあり、分科会中から次のアクションが生まれている。例えば、受け入れ側事業者に対する支援を表明する企業が現れ、個別に情報交換が始まっている。また、被災地における観光を考えるワーキンググループが立ち上がり、インターネット上で議論が始まっている。いずれにしても、第2回の開催までに、有志で被災地ツアーを企画し、実際に体験し議論を深めていく予定だ。

